

イメージマップを用いた 都市景観の評価手法に関する一考察

岐阜大学工学部 正会員 加藤 晃
岐阜大学工学部 学生会員 ○中尾宏之

1. はじめに

本研究では、今や都市計画において重要な一角を担っている都市景観という抽象的かつ心理的な事柄を題材に取り、今後の都市をより美しく、楽しく、住み良い都市にしていくための有効的で効率的な評価手法をイメージマップを用いることにより明示する方法を提案する。

2. イメージマップを用いた都市景観の評価手法

まず、「優れた都市景観を持った都市とはどのような都市か」という本研究の重要な課題を、イメージという概念を用いることによって、「都市全体の視覚的なイメージが一貫した密度の高いものとなっている都市である」と定義する。このことは、優れた都市景観を持った都市ほど、人々はその都市を訪れた時に強いイメージを持ち記憶していることから説明できる。そこで、イメージをより具体的な形として表現することによって、都市におけるイメージの密度を表現することが可能となる。そして、この定義に基づいて都市の景観を評価することができると考えた。

【都市景観構成要素】

本研究ではイメージマップ作成するために都市空間を、山、森林、田園や河川などの自然空間と人間の手によって作り出された人工空間とに分類し、さらに、人工空間を街路、広場、公園や水辺のような不特定の人々が自由に活動できる公共的な外部空間と、建築物のような主として個人や企業により所有され特定の人々しか活動できない私的な内部空間とに分類した。そして、これらの空間の中で、人工空間の街路空間、広場・公園空間、水辺空間と建築物の空間の4つの空間を都市景観を構成している要素として考える。ただし、内部空間については本研究の対象とはしない。そこで、これらの空間要素のイメージを総合的に評価することにより都市全体の景観を評価することが可能となる。ただし、これらの4つの構成要素は各々単独のものではなく、相互に空間要素の一部になっている場合が多い。

【イメージの形成と形態】

イメージというものは、実際には個人が五感を通じて描き出すものであるが、本研究では、その個人独自のイメージを空間要素に転写し、それを要素独自のイメージとすることにより、要素のイメージを効率良くしかも明確に評価することを可能にした。人間のイメージを形として表現することは非常に困難であり、かつ、要素に対して共通なイメージの形を引き出すことは不可能である。しかし、イメージの強度を表現することは、個人の表現力や語彙力に左右されることなく可能であるし、表現されたものと真のイメージの強さとは、それほどの差異はないと考えられる。そこで、前に分類した空間要素のイメージの強度分布を、三次元的な広がりを持つものと仮定することにより図-1のように表現することができる。

A地点でのイメージ強度



図-1 イメージ強度の分布形

- ①空間要素の中心のイメージ強度は要素の形態のみによって与えられるものであり、要素の中心及び軸に近づくほどイメージは強くなり、分布形の高さは高くなっていく。
- ②分布の底面の形状と広がり具合は、空間要素独自の形態と、要素を取り囲んでいる建造物の状態によって得られるものであり、分布の底面の広がりが多いほど、その要素がより人々に認知されやすい状態や形態を持っていることがいえる。
- ③イメージは、人の移動に伴い連続的に形成されることから、分布形は連続的で滑らかな形をしている。

【イメージの結合と相互作用】

都市のイメージを評価するのにあたり、都市内の空間構成要素を個別に評価するだけでなく、要素間の相互作用をも分析する必要がある。人は都市をイメージする時に、個々の要素のイメージを無意識的に統合させることにより、都市全体のイメージを作り上げている。イメージを統合する手段として、視覚による結合が考えられるが、実際には市街地内は建物などにより、見晴らしの良好な開けた空間は少なく、一つの空間から他の空間を認知することが困難な構造になっている。そこで、要素同士の視覚による結び付きを二つの場合から捉えていくことにする。

【i. 遠景としての結合】空間要素を取り囲んでいる障害物のレベルよりも、要素(の一部)の方が高いレベルに位置しており、都市のある要素から他の要素を眺めた時、それが遠景となっていることから、視覚的な結合が得られる場合。例えば、塔のように建造物自体が高くなっていたり、要素付近が丘になっているような地形的に高いレベルになっている場合がある。(写真-1)

【ii. 街路や河川を通しての結合】西欧でよく見られる場合であり、イメージの強い広場から、街路が四方へ、あるいは放射状に伸びていることで、街路から広場、広場から街路を認知しやすい状態になっていることから、視覚的な結合が得られる場合。日本では街路の正面に駅前広場が広がるような状態などがある。(写真-2)

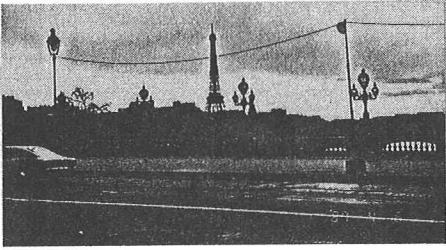


写真-1 遠景となるエッフェル塔

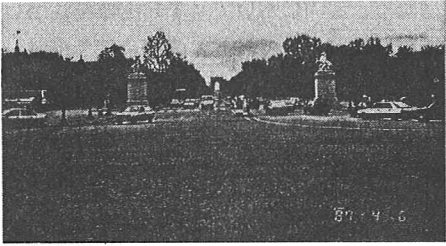


写真-2 コンコルド広場-シャンゼリゼ通り-凱旋門

ところで、要素同士が結合するのに伴い、その要素間には新しい性格を持った二次的なイメージ空間が形成される。このイメージ空間は、要素の相互作用によってのみ形成される空間であり、互いの要素独自のイメージが強いほど、あるいは、要素間の距離が近いほどその空間のイメージは強くなると考えられる。

【イメージマップの作成及び評価(パリを例にして)】

イメージマップを作成するのにあたり、以上に述べてきたことを考慮しながら、次の手順に従って作成していく。〔step 1〕都市内(対象地域内)から人々がある程度共通して強いイメージを持っている空間要素を抽出す

る。〔step 2〕個々の空間要素のイメージ強度の分布を作成し、地図上に転写する。〔step 3〕空間要素の結合と相互作用を考慮しながら、地図上の分布を修正していく。

ここで、本来なら幾つかの都市において作成したイメージマップを明示しなければならないところだが、本論文では紙面の都合上、パリの一例に止めておく(図-2)。この図からパリを評価してみると次のようなことが言える。パリは強いイメージを持った空間要素が非常に多く、イメージの密度が非常に濃い都市であることが分かる。また、セーヌ川とセーヌ川の右岸に形成された軸、そして、エッフェル塔や凱旋門などのランドマークにより、各々の空間要素が結合し合い、都市全体が非常に分かりやすくイメージしやすいものとなっている。これらのことから、パリは景観的に非常に優れた都市であることが実証される。

3. まとめ

本研究では一つの定義を基に、空間要素のイメージ強度の分布を仮定することによって、都市全体のイメージ密度を表現できるイメージマップを見いだし、都市の景観を評価することを可能にした。しかし、実際には、イメージ分布形を正確に作り出すことはできず、研究者の主観が入ってしまうのが実状であるが、この手法は都市の景観を評価する一つの目安となるものであることから、それほど正確なものが必要としていない。また、この手法は、都市の景観評価のみに止まらず、都市の景観計画において、景観を高める効果的な修景地点の探索にも役立つものであると考える。

【参考文献】

- 1) 都市のイメージ; Kevin Lynch著、丹下健三、富田玲子訳
- 2) 都市のデザイン; Edmund N. Bacon著、渡辺定夫訳

